

# 上海日本人学校浦東校における指導計画とその特色

前上海日本人学校浦東校 教諭

愛知県豊田市立益富中学校 教諭 鈴木 文与志

キーワード：職員チームワーク、日常、保護者のニーズ

## 1. はじめに

人口は約13億。近代化が進み、かつ多民族をかかえて生活している中国。その中の大都市である上海。2010年の上海万博を契機に、地下鉄網の整備をはじめ近代的な都市として著しい発展を続けている。

その中において、上海日本人学校虹橋校の児童数が増大し、受け入れ困難になったため、新しく上海に設置された上海第二の日本人学校、上海日本人学校浦東校に勤務する機会に恵まれた。平成18年度の新設により、現在の虹橋校（小学部のみ）と本校の浦東校（小学部と中学部）の二校に分かれて教育活動を行っている。

私とその現場に携わった3年間で得た経験の一部を紹介させていただく。

## 2. 日本の学校に負けない学校を目指したい

海外に在留する日本人の子どもが、国内の小・中学校における教育と同等の教育を受ける権利を実現するための在外教育施設上海日本人学校浦東校。全国さまざまな教育現場を経験した者から現地採用された者まで、学校長をはじめそこに勤務するすべての教職員が、「児童・生徒のために、日本の学校に劣らない、感動を味わえるいい学校にしたい」という思いをもって、日々の教育活動に携わってきた。まずは日常の取り組みを、私が所属した学年（中学部3年6クラス編成）からの視点で、いくつか紹介する。

### (1) どんな一年にしたいかという職員間の確固たる思い

学年目標 『R a i n b o w ～虹のごとく～』

6人の先生には6通りの個性。6つのクラスにも所属する生徒の人間模様によって6つのクラスカラーが存在する。まずは、自分の色を十分に出した学級経営を。そして、それぞれのクラスカラーがありながらも、時には学年としてしっかり並んでいこうとする、そんなエネルギーが各学級には要求される。輝きを放つ一つ一つの色が集結すると、それは「虹のごとく」さらなる輝きを放つ。これが学年の理想であって、1年後の姿であるとイメージする。何よりも大切なのは、みんながそう思い続けること。



学年廊下中央に掲示された学年目標

### 学年職員の団結と生徒への思いを歌にのせて

歌える学年でありたい。さまざまな節目において、学年集会等で教師による歌を披露してきた。多忙であってもしっかり練習して、1年間生徒の前でその姿を出し続けることを目標にした。この学年には音楽の先生がおり、ピアノに長けている先生もいるという利点を最大限に生かした試みである。年度始めの学年集会での「風の中の青春」から卒業前の最後の学年集会での「翼が今」まで、生徒たちは真剣にその歌声に耳を傾け、エールを送ってくれた。こんな取り組みが、学年として人の話やなかまの発表をしつ

かり聞ける集団としての力をつける一端となったようにも思う。

## (2) 学校行事

中学3年生にとって、学年目標の柱のひとつである「リーダーシップ」を発揮し、尊敬される先輩としての姿を出し切る場である。

### 体育祭

日本では決して味わうことのできない小中合同の運動会。中学生は、小学生の純粹で一生懸命な姿に心が洗われ、小学生は、中学生の真剣でカッコいい姿に感動する。

児童・生徒在籍数の増加にも伴い、平成24年度より小中別の運動会・体育大会を実施することとなり、それに伴い競技内容に更なる進化を遂げた。中でも中学部の3学年合同による男女それぞれの「表現」では、男らしさ・女らしさを追求したすばらしい演技を披露した。本活動の最大のねらいは、生徒の主体性を存分に引き出すことである。演技の土台づくりや練習中の安全管理等の支援はあるものの、それ以外は、練習における集合から解散までの指示や練習の実際まで、男女各15名ほどからなる表現リーダーが中心となって動いている。男子表現は「愉快的集団行動と力強い組み体操」、女子表現「心をひとつに、壮大なダンスチーム」。本番に至るまでの練習で何回も失敗を繰り返した中で本番の成功に、観客は大いに沸き、感動に涙する生徒の姿に鳥肌が立つほどであった。

### 学習発表会（文化祭）

文化部や有志参加による舞台発表、教室が会場となり各学年学級の学習成果を披露する展示発表、そして合唱発表から成る。感動ときには笑いを誘う素晴らしい学習発表会であった。

会を創り上げる上で一番大切にすることは、コンセプトである。平成24年度は「種から大木 ～小さな思いからの成長～」を、平成25年度では「出会いと別れ」をそれぞれテーマに、会全体の発表が一つの思いでつながっていることが感じられる進行を目指してきた。その中における集大成が、会の最後に全観衆に向けて披露する中学部全体での学部合唱である。平成24年度は「青葉の歌」、平成25年度は「虹」と700名に迫る生徒の歌声が、会のテーマを完結させるにふさわしいパフォーマンスとなった。

本活動の最大のねらいも、体育大会同様、生徒の主体性を存分に引き出すことにある。朝の時間を使っての学年ごとのパート練習から昼の時間を使っての全体練習まで、すべてパートリーダーである生徒が前面に立って進行およびアドバイス等を行った。また、生徒会執行部が学習発表会当日に向けて、学校全体を盛り上げるためのさまざまな試みを行った。コンセプトを意識した会の流れや、会場を飽きさせないために作成されたオリジナルCMなどもそのひとつである。

## (3) 卒業期を迎えての3学期の動き

### 中3「レインボープロジェクト」結成に向けて

中3の3学期になると、各学級、学年の仲間全員がそろうことはほとんどなく、学級によっては半数くらいになってしまう時期を迎えることもある。その理由は高校入試であり、上海日本人学校中学部3年の宿命である。これまで共に生活してきた仲間として、今後入試等で学校を一時的に離れる者は学校にいる者に思いを託し、学校生活ができる者は、いない者の思いを裏切らない。これまでに築いてきた信頼を力にして、この最後の学期を充実したものとなるよう目指してきた。

そのひとつの試みとして、実行委員会として「レインボー・プロジェクト」を立ち上げることにした。このプロジェクトは、卒業に向けて予定されている行事「3年生の話を聴く会」「3年生を送る会」「卒業遠足」「学年レク」を盛り上げていく役割を担う。自身の今後の日程とよく相談しながら、可能な限り力になってほしいと学年集会で訴えてきた。予想以上に希望者が集まり、それぞれが心の残る力になった。

### 3. 日本教育とは言え、ここは上海。保護者のニーズにも応える

#### (1) 現地上海の教育事情

現地の小中学校では小学3年生から英語（英会話は小学校1年生）が取り入れられ、外国語教育に力を入れている。小学生のうちに、日本で言う中学校での課程修了程度の内容の習得を目指しており、中学校からはアウトプットを軸にした英語教育が展開されている。授業は小中ともにオール・イングリッシュで、電子黒板を巧みに使った授業展開がなされている。授業は毎日あり、それに加え家庭学習をうまくリンクさせ、英語に触れる機会を確保することで英語力の定着を目指している。これまで目にした中国人の児童・生徒の半数以上は、英語でのコミュニケーションがとれる。

#### (2) 日本人学校での教育事情

現地上海の教育事情の影響もあり、語学の習得に対する保護者からのニーズが高い。このことを受けて、中国語と英会話を全学年で実施するなど海外日本人学校ならではの特色も取り入れている。次年度からは、よりきめ細やかな指導と英語に触れる機会を増やすこと、そして通常の英語の授業とのタイアップを目的に、ALTの増員および活動場所の確保、カリキュラムの見直し等に取り組む。

英会話…小学部1年から中学部3年まで全学年において英会話の授業を実施している。小学部においては、歌やゲームなどを中心に楽しみながら英会話に親しむことをねらいとして授業を進めている。中学部においては、通常の英語の授業を補足するアウトプットを中心に英語のネイティブスピーカーの講師が授業を行い、授業は全て英語で進められる。

中国語…小中全学年で中国語の授業を行っている。子どもたちの中国語の会話のレベルは様々であるので、全学年で4～5展開の習熟度別の少人数指導を徹底している。指導は日本語ができる中国人教師によって行われている。

近年、中学部卒業後の進路で、現地のインター校への進学を希望する生徒が増加傾向にある。これまでに同じ学校を受験した諸外国（中国、韓国など）の生徒たちの英語によるコミュニケーション能力の高さを見せつけられた本校の卒業生も少なくない。彼らに負けない語学力を身に付けるに必要な力は、「日々の積み上げ（継続）」である。本校での取り組みが、語学力向上の一端を担っている。

### 4. 海外だからこそできること、学べること

#### (1) 宿泊的行事（修学旅行）

小学部5年生以上は、宿泊学習を行い中国の文化や伝統に直接触れる機会を設けている。中3の修学旅行では、「知る」をテーマに、

1. 「中国を知る」：何かの縁で生活している中国をさらに知ること、中国という国の良さを知り、もっと好きになれるようにという願いがそこにはある。
2. 「新しいクラスメイト、なかまを知る」：泊を伴う旅行のすばらしいところは、普段の学校生活では気付かないものに触れ、何か親近感が湧いてくるところである。5、6月実施ということでタイムリーな時期と言える。

をしっかりと意識しての学習とすることができた。

「知る」ことができると、「好き」になるチャンスが生まれてくる。「好き」になると、中国での生活、クラスメイトと共にする学校生活がもっと楽しくなるはず。そんな願いが込められている。

今年度訪問した西安は、中学校社会科における歴史で学習する内容に含まれた地域である。事前学習では、西安にゆかりのある人物について調べてきた。秦の始皇帝を始め、漢の時代の皇帝であった「景帝」、三蔵法師、空海という歴史上の偉大な人物像を追い求める中で、観光場所となっている兵馬俑や漢陽陵、そして大雁塔や青龍寺に迫っていった。西安に行くことへの意義をしっかりと理解し、学習することができた。

## (2) 中日スピーチ大会

将来、中国と日本の架け橋となる子どもが育ってほしいという願いのもと、1997年より日中国交正常化25周年を記念して始められた本大会。現地の学校に通う中国人の生徒を本校に招待して、日本人は中国語で、中国人は日本語でスピーチする。過去の歴史や政治的な部分で問題が絶えない中、若者たちの思いは建設的でうれしい気持ちにさせられる主張ばかりである。

## (3) 現地校交流

国際的な視点で物事を考えられる児童・生徒の育成をねらいとして、発達段階に即した現地校との交流学习を各学年で行っている。中3での交流前に確認されたことは、

1. 誰でも経験できるわけではない中国（上海）での生活。いつか中国（上海）について自分の言葉で語れること。これこそが自分が確かに中国（上海）で生活していた証である。
2. これまで共に生活してきた仲間との残された時間と、ほとんどの学年の仲間と一生会えないかもしれないという思いに立って、海外での有意義な思い出にしよう。

ということであった。

残された時間の中で、学年として今一度、今しかできないことの1つとして計画された現地校交流会。将来どこかで中国を語る時の大切な財産となるよう願いを込めて行われた。

当日のスポーツ交流や言葉によるコミュニケーション交流に向けて、学級委員会を中心に生徒の手でさまざまな準備や練習をしてきた。そんな中、生徒たちにあるひとつの心配事について投げかけてみた。「昨年度は、日中の政治的な問題により、このような会をもつことができませんでした。今年、本校に訪問する中国の生徒さんたちはどんな気持ちで来るのでしょうか?」と。

話し合いを重ね、学年全体に投げかけた結論は、「不安や複雑な気持ちは、迎える私たちの歓迎の姿で追いつくしかありません。心からの歓迎をよく思わない人はだれもいないと思います。今回はこの心からの歓迎を「みんなの出迎えの姿」と「合唱『虹』」で表したいと思います。歓迎の気持ちを込めることを第一に考え、本番に臨みましょう。」だった。そこから、本格的な合唱朝練と細かい準備が始まったのである。

### 交流後の振り返り用紙

中3 現地校交流会に参加して

① 今回の現地校交流は、あなたにとって良いものになりましたか（もちろん良いものと思わなかったこともあり得るが・・・）。どんな所でどのように思えたのか教えてください。

とても良い経験になりました。中国の生活が初めて。一緒に遊んだり、写真を撮ったり、最後には電話番号も交換して、帰国日にメールやLINEをしました。中国語の勉強にも役に立つと思います。これからも頑張りたいです。

② 彼らとの関わりの中から、何か発見できたことがありますか。（中国の学校の様子、考え方や習俗の差異、活動の様子から）

言葉は違っても文化は同じという感じがしました。それは言葉を使わずに手話（手）や表情で伝わったり、足で伝えている。足で伝えているのは、中国の文化の特色だと思います。

### 交流後の生徒の言葉～振り返り用紙から抜粋～

「笑顔いっぱい交流会だった。日中の問題って何だろうって思った。」  
「中国の学生は、みんなイングリッシュネームもっていて、英語がとても上手くびっくりした。」  
「中国の生徒たちは、会の節目毎に自然と拍手がおこる雰囲気があり、やらされている感が全くない。」  
「日中混合チームでやったインディアカで率先して羽を追う姿や英語を使う姿に、消極的な日本人との習慣の違いを感じた。」  
「彼らから、学校の掲示物がすごいとほめてくれたことがとてもよかった。」  
「彼らは日本の芸能や漫画についてよく知っている。」  
「上海の学校での勉強はかなり大変そう。」

## 5. おわりに

日本にいた時の自分に、中国という国はどのように映っていたのだろうか。特異な出来事についてしか流れない、そんなメディアの情報が私の知る中国のすべてだった。初めて上海に来ての生活を経験し、中国の生活様式や食べ物を知り、人々に触れる。そこに初めて日常の中国というものがあつた。日本にいては、どれだけ勉強しても決して見えないものであり、観光旅行をしても決して感じられないものである。

日本に帰った後、中国について何も答えられない自分がいてはあまりにも空しい。どんなことでもいい。いつまでも自分の言葉で中国を語れる人でありたいと思っている。それが、ここ上海で生活した時間が輝くことにつながるのだから。